

旅なかま

ハンス・クリスティアン・アンデルセン
楠山正雄 訳

かわいそうなヨハンネスは、おとうさんがひどくわざらつて、きょうあすも知れないほどでしたから、もうかなしみのなかにしずみきつっていました。せまいへやのなかには、ふたりのほかに人もいません。テーブルの上のランプは、いまにも消えそうにまばたきしていて、よるももうだいぶふけていました。

「ヨハンネスや、おまえはいいむすこだった。」と、病人のおとうさんはいいました。「だから、世の中へでても、神さまがきっと、なにかをよくしてくださいよ。」

そういうて、やさしい目でじっとみながら、ふかいため息をひとつつくと、それなり息をひきとりました。それはまるでねむつているようでした。でも、ヨハンネスは泣かずにはられません、この子はもう、この世の中に、父親もなければ、母親もないし、男のきょうだいも、女のきょうだいもないのです。かわいそうなヨハンネス。ヨハンネスは、寝台のまえにひざをついて、死んだおとうさんの手にほおずりして、しょっぱい涙をとめどなくながしていました。そのうち、いつか目がくつついで、寝台のかたい脚にあたまをおしつけたなり、ぐつすり寝こんでしまいました。

寝ているうちに、ヨハンネスは、ふしぎな夢をみました。お日さまとお月さまとがおりて来て＊礼拝をするところをみました。それから、なくなつたおとうさんが、またげんきで、たつしやで、いつもほんとうにうれしいときするようなわらい声をきかせました。ながい、うつくしい髪の毛の上に、金のかんむりをかぶつたうつくしいむすめが、ヨハンネスに手をさしのべました。するとおとうさんが「ごらん、なんといいおよめさんをおまえはもらつたのだろう。これこそ世界じゅうふたりとないうつくしいひとだ。」といいました。おや、とおもうとたん、ヨハンネスは目がさめました。うつくしい夢はかけもかたちもなくて、おとうさんは死んで、つめたくなつて、寝台にねてしました。たれひとりそこにはいません。なんてかわいそうなヨハンネス。

*ヨセフまたひとつ夢を見てこれをその兄弟に述べていけるは我また夢をみたるに日と月と十一の星われを拝せりと。（創世記三七ノ九）

次の週に、死人はお墓の下にうまりました。ヨハンネスはぴつたり棺につきそつて行きました。これなりもう、あれほどやさしくしてくださつたおとうさんの顔をみるとできなくなるのです。棺の上にばらばら土のかたまりの落ちていく音を、ヨハンネスはききました。いよいよおしまいに、棺の片はしがちらつとみえました。そのせつな、ひとすくい土がかかると、それもふさがつ

てしましました。みているうち、いまにも胸がちぎれそうに、かなしみがこみあげてきました。まわりでうたうさんび歌がいかにもうつくしくきこえました。きくうちヨハンネスは、目のなかに涙がわきだしてきました。で、泣きたいだけ泣くと、かえつて心持がはつきりしてきました。お日さまが、みどりぶかい木立の上に晴ればれとかがやいて、それは「ヨハンネス、そんなにかなしんでばかりいることはないよ。まあ、青青とうつくしい空をごらん。おまえのとうさんも、あの高い所にいて、どうかこのさきおまえがいつもしあわせでいられるよう、神さまにおねがいしているところなのだよ。」と、いつているようでした。「ああ、ぼく、あくまでいい人になるう。」と、ヨハンネスはいました。「そうすれば、また天国でおとうさんにあうことになるし、あえたたら、どんなにたのしいことだろう。そのときは、どんなにたくさん、話すことがあるだろう、そうして、おとうさんからも、ずいぶんいろいろのことをおしえてもらえるだろう。天国のりつぱな所もたくさんみせてもらえるだろう。それは生きているとき、地の上の話を、たんとおとうさんはしてくださいたものだつた。ああ、それはどんなにたのしいことになるだろうな。」

ヨハンネスは、こうはつきりとじぶんにむかっていってみて、ついほほえましくなりました。そのそばから、涙はまたほほをつたわってながれました。あたまの上で小鳥たちが、とちの木の木立のなかから、ぴいちくち、ぴいちくちさえずつていきました。小鳥たちはおとむらいに来ていながら、こんなにたのしそうにしているのは、この死んだ人が、いまではたかい天国にのぼつていて、じぶんたちのよりももつとうつくしい、もつと大きいしばさがはえていることや、この世で心がけのよかつたおかげで、あちらへいつても、神さまのおめぐみをうけて、いまではしあわせにくらしていることをよく知つているからでした。この小鳥たちが、緑ぶかい木立をはなれて、とおくの世界へとび立つていくところを、ヨハンネスはみおくつて、じぶんもいつしょにとんでいきたくなりました。

けれども、さしあたりまず、大きな木の十字架を切つて、それをおとうさんのお墓に立てなければなりません。さて、夕がた、それをもつていきますと、どうでしよう、お墓にははあるく砂が盛つてあつて、きれいな花でかざられていました。それはよその知らない人がしてくれたのです。なくなつたおとうさんはいい人でしたから、ひとにもずいぶん好かれています。

さて、あくる日朝はやく、ヨハンネスは、わずかなものを包にまとめ、のこつた財産の五十ターレルと二、三枚のシリング銀貨とを、しつかり腰につけました。これだけであってもなしに世の中へ出て行こうというのです。いよいよ出かけるまえ、まず墓地へいつて、おとうさんのお墓におまいりして、主のお祈をとなえてから、こういました。

「おとうさん、さよなら。ぼくは、いつまでもいい人間でいたいとおもいます。ですから、神さまが、幸福にしてくださるようになんてください。」

ヨハンネスがこれからでていこうといこう野には、のこらすの花があたたかなお日さまの光をあびて、いきいきと、美しい色に咲いていました。そうして、風のふくままで、それが、がつてんがつてんしていました。「みどりの国へよくいらっしゃいましたね、ここはすいぶんきれいでしよう。」といつてているようでした。けれど、ヨハンネスは、もういちどふりかえって、ふるいお寺におなごりをおしました。このお寺で、ヨハンネスはこどものとき洗礼をうけました。日曜日にはきまつて、おとうさんにつれられていつて、おつとめをしたり、さんび歌をうたつたりしました。そのとき、ふと、たかい塔の窓の所に、お寺の＊小魔が、あかいとんがり頭巾をかぶつて立つているのがみえました。小魔は目のなかに日がさしこむので、ひじをまげてひたいにかざしているところでした。ヨハンネスはかるくあたまをさげて、さよならのかわりにしました。小魔は赤い頭巾をふつたり胸に手をあてたり、いくどもいくども、＊＊投げキッスしてみせました。それは、ヨハンネスのためにかずかす幸福のあるように、とりわけ、たのしい旅のつづくようにいのつてくれる、まごころのこもつたものでした。

* 家魔。善魔で矮魔の一種。ニース(Nis)。人間の家のなかに住み、こどもの姿で顔は老人。ねずみ色の服に赤い先の尖つた帽子をかぶる。お寺にはこの仲間が必ずひとりずついて塔の上に住み、鐘をたたいたりするという。
＊＊じぶんの手にせつぶんしてみせて、はなれている相手にむかつてその手をなげる形。

ヨハンネスは、これから、大きなにぎやかな世間へでたら、どんなにたくさん、おもしろいことがみられるだろうとおもいました。それで、足にまかせて、どこまでも、これまでついぞ来たこともない遠くまで、ずんずんあるいて行きました。通つていく所の名も知りません。出あうひとの顔も知りません。まつたくよその土地に来てしまつていました。はじめての晩は、野ツ原の、枯草を積んだ上にねなければなりませんでした。ほかに寝床といつてはなかつたのです。でも、それがとても寝ごこちがよくて、王さまだけつこうな寝床にはお休みにはなるまいとおもいました。ひろい野中に小川がちよろちよろながれていて、枯草の山があつて、あたまの上には青空がひろがつていて、なるほどりつぱな寝ベやにちがいあり

ません。赤い花、白い花があいだに点々と咲いているみどりの草原は、じゅうたんの敷物でした。にわとこのくさむらとのばらの垣が、おへやの花たばでした。洗面所のかわりには、小川が水晶のようなきれいな水をながしてくれましたし、そこにはあしがこつくり、おじぎしながら、おやすみ、おはようをいつてくれました。お月さまは、おそろしく大きなランプを、たかい青天井の上で、かんかんともしてくださいましたが、この火がカーテンにもえつく気づかいはありません。これならヨハンネスもすっかり安心してねられます。それでぐつすり寝こんで、やつと目をさますと、お日さまはもうとうにのぼって、小鳥たちが、まわりで声をそろえてうたつていました。

「おはよう。おはよう。まだ起きないの。」

お寺では、かんかん、鐘がなっていました。ちょうど日曜日でした。近所のひとたちが、お説教をききに、ぞろぞろでかけていきます。ヨハンネスも、そのあとからついていくて、さんび歌のなかまにまじって、神さまのお言葉をきました。するうち、こどものとき、洗礼をうけたり、おとうさんにつれられて、さんび歌をいつしょにうたつた、おなじみぶかいお寺に来ているようにおもいました。

お寺のそとの墓地には、たくさんお墓がならんでいて、なかには高い草のなかにうずまっているものもありました。それをみると、ヨハンネスは、おとうさんのお墓も草むしりして、お花をあげるものがなければ、やがてこんなふうになるのだとおもいました。そこで、べつたりすわって、草をぬいてやつたり、よろけている十字架をまつすぐにしてやつたり、風でふきとんでいる花環をもとのお墓の所へおいてやつたりしました。そんなことをしながら、ヨハンネスはかんがえました。

「たぶん、おとうさんのお墓にも、たれかが、おなじことをしておいてくれるでしょう、ぼくにできいかわりに。」

墓地の門そとに、ひとり、年よりのこじきがいて、よぼよぼ、松葉づえにすがっていました。ヨハンネスは、もつていたシリング銀貨をやつてしましました。それですっかりたのしくなり、げんきになつて、またひろい世の中へでていきました。「#「。」は底本では欠落」

夕方、たいへんいやなお天気になりました。どこか宿をさがそうとおもつて、いそぐうち、夜になりました。でもどうやら、小山の上にぽつつり立つてあるちいさなお寺にたどりつきました。しあわせと、おもての戸があいていたので、そつとそこからはいました。そうして、あらしのやむまでそこにいることにしました。

「どこかすみっこにかけさせてもらおう。」と、ヨハンネスはいつて、なかにはいつていきました。

「なにしろひどくたびれている、すこし休まではいられない。」

こういつて、ヨハンネスはそこにどたんとすわって、両手をくみあわせて、晩のお祈をいいました。こうして、いつか知らないまに寝込んで、夢をみていました。そのあいだに、そとでは、かみなりがなつたり、いなづまが走つたりしていました。

やつと目がさめると、もう真夜中で、あらしはどうにやんで、お月さまが、窓からかんかん、ヨハンネスのねている所までさし込んでいました。ふとみると、本堂のまんなかに、死んだ人を入れた棺が、ふたを開けたまま置いてありました。まだお葬式がすんでいなかつたのです。ヨハンネスは正しい心の子でしたから、ちつとも死人をこわいとはおもいません。それに死人がなにもわるいことをするはずのないことはよくわかつっていました。生きているわるいひとたちこそよくないことをするのです。ところへ、ちょうど、そういう生きているわるい人間のなかまがふたり、死人のすぐわきに来て立ちました。この死人はまだ埋葬がすまないので、お寺にあづけておいてあつたのです。それをそつと棺のなかに休ませておこうとはしづに、お寺のそとへほうりだしてやろうという、よくないたくらみをしに來たのです。死んだ人を、きのどくなことですよ。

「なんだつて、そんなことをするのです。」と、ヨハンネスは声をかけました。「ひどい、わるいことです。エスさまのお名にかけて、どうぞそつとしてあげておいてください。」

「くそ、よけいなことをいうない。」と、そのふたりの男はこわい顔をしました。「こいつはおれたちをいつぱいはめたんだ。おれたちから金を借りて、かえさないまま、こんどはおまけにおッ死んでしまやがつたんだ。おかげで、おれたちの手には、びた一文かえりやしない。だからかたきをとつてやるのだ。寺のそとへ、犬ツころのようにほうりだしてやるのだ。」

「ぼく、五十ターレル、お金があります。」と、ヨハンネスはいいました、「これがもらつたありつけの財産ですが、そつくりあなた方に上げましよう。そのかわり、けつしてそのかわいそうな死人のひとをいじめないと、はつきり約束してください。なあに、お金なんかなくつてもかまわない。ぼくは手足はたつしやでつよい、それにしじゅう神さまが守つっていてくださるとおもうから。」「そうか。」と、そのにくらしい男どもはいました。「きさま、ほんとうにその金をはらうなら、おれたちもけつして手だしはないさ、安心しているがいい。」

こういつて、ふたりは、ヨハンネスのだしたお金をうけとつて、この子のお人よしなのを大わらいにわらつたのち、どこかへ出

て行きました。でも、ヨハンネスは死人を、またちゃんと棺のなかへおさめてやつて、両手を組ませてやりました。さて、さよならをいうと、こんどもすっかりあかるい、いい心持になつて、大きな森のなかへはいつていきました。

森のなかをあるきながらみまわすと、月あかりが木立をすけてちらちらしているなかに、かわいらしい妖女たちのおもしろそうにあそでいるのが目にはいりました。妖女たちはへいきでいました。それは、いま方はいつて来たヨハンネスが、やさしい、いい人間だということをよく知っているからでした。わるい人間だけには、妖女のすがたがみたくとも見えないです。まあ、かわいらしいといって、ほんとうに、指だけのせいもない妖女もいましたが、それぞながい金いろの髪の毛を、金のくしですいでいました。ふたりずつ組になつて、木の葉や、たかい草の上にむすんだ大きな露の玉の上でぎつたんばつたんしていました。ときどきこの露の玉がころがりだすと、のつているふたりもいつしょにころげて、ながい草のじくのあいだでとまります。すると、ほかのちいさいなかもに、わらい声とときの声がおこりました。それはずいぶんおもしろいことでした、そのうち、みんな歌をうたいだしましたが、きいているうち、ヨハンネスは、こどものじぶんおぼえた歌を、はつきりおもいだしました。銀のかんむりをあたまにのせた大きなまだらぐもが、こちらの垣からむこうの垣へ、ながいつり橋や御殿を網で張りわたすことになりました。さて、そのうえにきれいな露がおちると、あかるいお月さまの光のなかでガラスのようにきらきらしました。こんなことがそれからそれとつづいているうち、お日さまがおのぼりになりました。すると、妖女たちは、花のつぼみのなかにはい込みました。朝の風が、つり橋やお城をつかむと、それなり大きなくもの網になつて、空の上にとびました。

さて、ヨハンネスがいよいよ森を出ぬけようとしたとき、しつかりした男の声で、うしろからよびとめるものがありました。

「そもそも、ご同行、どこまで旅をしなさる。」

「あてもなくひろい世間へ。」と、ヨハンネスはいいました。「父親もなし、母親もなし、たよりのないわかものです。でも神さまは、きつと守つてくださるでしょう。」

「わたしも、あてもなく世間へでていくところだ。」と、その知らないひとはいいました。「ひとつ、ふたりでなかもになりましょうか。」「ええ、そうしましよう。」と、ヨハンネスもいいました。そこで、ふたりは、いつしょに出かけました。じき、ふたりは仲よしになりました。なぜといって、ふたりともいい人たちだったからです。ただ、ヨハンネスは、この知らない道づれが、じぶんよりもはるかはるかかっこい人だということに、気がつきました。この人は世界じゅうたいていあるいていて、なんだつて話せないこと

はないくらいでした。

お口さまが、もうすいぶんたかくのぼったので、ふたりは大きな木の下に腰をおろして、朝の食事にかかりました。そこへ、ひとりのおばあさんがあるいて来ました。いやはや、ずいぶんなおばあさん、まるではうように腰をまげてあるいて、やつとしゅもくづえにすがつていきました。それでも、森でひろいあつめたたきぎをひとたば、せなかにのせていました。前掛が胸でからげてあつて、ヨハンネスがふとみると＊しだの木のじくにやなぎの枝をはめた大きいむちが三本、そこからとびだしていました。で、ふたりのいるまえをよろよろするうち、片足すべらしてころぶとたん、きやあとたかい声をたてました。きのじくに、このおばあさん、足をくじいたのですね。

*しだの木は魔法の木。しだの木のむちに、やなぎの枝の柄をはめる。

ヨハンネスはそのとき、ふたりでおばあさんをかかえて、住居までおくつていってやろうといいました。道づれの知らない人は、はいのうをあけて、小箱をだして、いや、このなかにこうやくがはいっている、これをつければ、すぐと足のきずがなおつて、もとどおりになるから、ひとりでうちへかえれて、足をくじいたことなどないようになるといいました。そして、そのかわりに、といつても、なあに、その前掛にくるんでいる三本のむちをもらうだけでいいのだがね、といいました。
「とんだ高い薬代だの。」と、おばあさんはいつて、なぜかみょうに、あたまをふりました。

それで、なかなか、このむちを手ばなししたがらないようすでしたが、くじいた足のままそこにたおれていることも、ずいぶんらくではないので、とうとう、むちをゆすることになりました。そのかわり、ほんのちょっとぴりくすりをなすつたばかりで、このおばあさん、すぐぴんと足が立つて、まえよりもたつしゃに、しゃんしゃんあるいていきました。これはまさしく、このこうやくのききめでした。でも、それだけに、薬屋などでめつたに手にはいるものではありません。
「そんなむちみたいなもの、なんにするんです。」と、ヨハンネスは、そこで旅なかまにたずねました。

「どうして、三本ともけつこうな草ぼうきさ。」と、相手はいいました。「こんなものをほしがるのは、わたしもとんだかわりものさね。」さて、それからまた、しばらくの道のりを行きました。

「やあ、いけない、空がくもつて来ますよ。」と、ヨハンネスはいました。「ほら、むくむく、きみのわるい雲がでて来ましたよ。」「いや。」と、旅なかもはいました。「あれは雲ではない。山さ。どうしてりっぱな大山さ。のぼると雲よりもたかくなつて、澄んだ空気のなかに立つことになる。そこへいくと、どんなにすばらしいか。あしたは、もうずいぶんとおい世界に行つていることになるよ。」

でも、そこまでは、こちらでながめたほど近くはありませんでした。まる一日たっぷりあるいて、やつと山のふもとにつきました。見あげると、まっくろな森が空にむかってつつ立つていて、町ほどもありそうな大きな岩がならんでいました。それへのぼろうというのは、どうしてひととおりやふたとおり骨の折れるしごこではなさそうです。そこで、ヨハンネスと旅なかもは、ひと晩、ふもとの宿屋にとまって、ゆっくり休んで、あしたの山のぼりのげんきをやしなうことになりました。

さて、その宿屋の下のへやの、大きな酒場には、おおぜい人があつまつていました。人形芝居をもつて旅まわりしている男が来て、ちょうどそこへ小さい舞台をしかけたところでした。みんなはそれをとりまいて、幕のあくのを待つさいちゅうでした。ところで、いちばんまえの席は、ふとつた肉屋のおやじが、ひとりでせんりようしていましたが、それがまた最上の席でもあつたでしょう。しかも大きなブルドックが、それがまあなんとくらしい、くいつきそくな顔をしていました。そやつが主人のわきに座をかまえて、いっぱい人間みなみに、大きな目をひからしていました。

そのうち、芝居がはじまりましたが、それは王さまと女王さまの出でくる、なかなかおもしろい喜劇でした。ふたりの陛下は、びろうどの玉座に腰をかけて、どうしてなかなかの衣裳もちでしたから、金のかんむりをかぶつて、ながいすそを着物のうしろにひいていました。ガラスの目玉をはめて、大きなうわひげをはやした、それはかわいらしくでくのぼうが、どの戸口にも立つていて、しめたり、あけたり、おへやのなかにすずしい風のはいるようにしていました。どうもなかなかおもしろい喜劇で、いい氣ばらしになりました。そのうち、人形の女王さまは立ち上がり、ゆかの上をそろそろあるきだしました。そのときまあ、れいのブルドックが、いつたい、なんどおもつたのでしょうか、それをまた主人がおさえもしなかつたものですから、いきなり、舞台にとびだして来て、おやというまもなく、女王さまのかぼそい腰をぱつくりかみました。とたん、「がりツがりツ」という音がきこえました。いやはや、おそろしいことでした。

かわいそうに、人形つかいの男はすっかりしょげて、女王さまの人形をかかえて、おろおろしていました。それは一座のなかでも、

いちばんきりようよしの人形でしたのに、にくにくしいブルドッグのために、あたまをかみきられてしまったのですからね。けれども、みんな見物が散つてしまつたあと、ヨハンネスといつしょにみに来ていた旅なかも、こんども、そのきずをおしてやろうといいだしました。そこで、れいの小箱を開けて、おばあさんのくじいた足を立たせてやつたあのこうやくを、人形にぬつてやりました。人形は、こうやくをぬつてもらうと、さつそくきずがきれいになおつて、おまけに、じぶんで手足までたつしやにうごかせるようになりました。もう糸であやつることもいらなくなりました。人形はまるで、生きた人のようでした。ただ口がきけないだけです。人形芝居の親方は、どんなによろこんだでしょう。人形つかいがつかわないでも、この人形は勝手にじぶんでおどれるのです。これは、ほかの人形にまねのならないことでした。

夜中になつて、宿屋にいた人たちがのこらず寝しづまるうというとき、どこかでしくしくすすり泣く声がして、いつまでもやまないものですから、みんな気にして起きあがつて、いつたい、たれが泣いているのか見ようとしました。それがどうも人形芝居の舞台のほうらしいので、親方がすぐ行つてみますと、でくのぼうは、王さまはじめのこらずの近衛兵がかさなりあつて、そこにころがつっていました。いまし方かなしそうにしくしくやつていたのは、このガラス目だまをきよどんとさせている人形なかもありました。それは、女王さまとおなじように、ちよっぴり、こうやくをぬつてもらつて、じぶんで勝手にうごけるようになりたいといふのです。すると、女王さまもそばで、べつたりひざをついて、そのりつぱな金かんむりをたかくささげながら「どうぞ、わたくしからこのかんむりをおとりあげください、そのかわり、夫にも、家来たちにも、どうぞお葉をぬつていただけますように。」といふのりました。そうきて、この人形芝居の親方は、きのどくに、人形たちが、ふびんでふびんでついいつしょに泣きだしました。親方はそこで、旅なかもにたのんで、あすの晩の興行のあがりをのこらずさしあげます。どうぞ、せめて四つでも五つでも、なかできりようよしな人形にだけでも、こうやくを塗つてやつてはもらえますまいかと、くれぐれたのみました。ところで、旅なかも、ほかのものは一切いらない、わたしのほしいのは、そのおまえさんの腰につるしている剣だけだといいました。そうして、剣を手に入れると、六つの人形のこらずにこうやくをぬつてやりました。すると人形たちは、さつそくおどりだしました。しかもその踊のうまいこと、そこみていたむすめたちが、生きている人間のむすめたちのこらずが、すぐといつしょにおどりださずにはいられないくらいでした。するうち、御者と料理番のむすめも、つながつておどりだしました。給仕人もへや女中も、おどりだしました。お客様たちも、いつしょにおどりだしました。とうとう十能と火ばしまでが、組になつておどりだしました。でも、このひと組

は、はじめひとはねはねると、すぐところんでしまいました。いやもう、ひと晩じゅう、にぎやかで、たのしかったことといつたら。つぎの朝、ヨハンネスは旅なかまとつれ立つて、みんなからわかれていきました。高い山にかかるて、大きなもみの林を通つていきました。山道をずんずんのぼるうちに、いつかお寺の塔が、ずっと目のしたになつて、おしまいにはそれが、いちめんみどりのなかにぽつつりとただひとつ、赤いいちごの実をおいたようにみました。もうなん里もなん里もさきの、ついいつしたことのない遠方までがみはらせました。——このすばらしい世界に、こんなにもいろいろとうつくしいものを、いちどに見るなんということを、ヨハンネスは、これまでに知りませんでした。お日さまは、さわやかに晴れた青空の上からあたたかく照りかがやいて、峰と峰とのあいだから、りょうしの吹く角笛が、いかにもおもしろく、たのしくきました。きいているうちにもう、うれし涙が目のなかにあふれだしてくると、ヨハンネスは、おもわずさけばずにはいられませんでした。

「おお、ありがたい神さま、こんないことをわたしたちにしてくださいて、この世界にあるかぎりのすばらしいものを、惜しまずみせてくださいますあなたに、まごころのせつぶんをささげさせてください。」

旅なかまも、やはり、手を組んだまま、そこに立つて、あたたかなお日さまの光をあびているふもとの森や町をながめました。ちようどそのときふと、あたまの上で、なんともめずらしく、かわいらしい声がしました。ふたりがあおむいてみると、大きいまつ白なはくちようが一羽、空の上に舞つていました。そのうたう声はいかにもうつくしくて、ほかの鳥のうたうのとまるでちがつていました。でも、その歌が、だんだんによわつて來たとき、鳥はがつくりうなだれました。そうして、それは、ごくものしづかに、ふたりの足もとに落ちて來ました。このうつくしい鳥は死んで、そこに横たわっているのです。

「ふりやあ、そろつてみごとなつばさだ。」と、旅なかまはいいました。「どうだ、このまつ白で大きいこと、この鳥のつばさぐらいになると、ずいぶんの金高だ、これは、わたしがもらつておこう。みたまえ、剣をもらつて来て、いいことをしたろうがね。」

こういつて、旅なかまは、ただひとつ、死んだはくちようのつばさを切りおとして、それをじぶんのものにしました。

さて、ふたりは山を越えて、またむこうへなん里もなん里も旅をつづけていくうちに、どうどう、大きな町のみえる所に來ました。その町にはなん百もない塔がならんで、お日さまの光のなかで、銀のようにきらきらしていました。町のまんなかには、りっぱな大理石のお城があつて、赤い金で屋根が葺けていました。これが王さまのお住居でした。

ヨハンネスと旅なかまとは、すぐ町にはいろいろとはしないで、町の入口で宿をとりました。ここで旅のあかをおとしておいて、

さっぱりしたようすになつて、町の往来をあるこうというのです。宿屋のていしゅの話では、王さまといふ人は、心のやさしい、それはいいひとで、ついぞ人民に非道をはたらいたことはありません。ところがその王さまのむすめというのが、やれやれ、なきないことにひどいわるもののお姫さまだというのです。きりようがすばらしくよくて、世にはこんなにもしとやかな人があるものかとおもうほどですが、それがなんになるでしょう、このお姫さまがいけない魔法つかいで、もうそのおかげで、なんどとなくりっぱな王子が、いのちをなくしました。——それはたれでもお姫さまに結婚を申しこむおゆるしが出ていて、それは王子であろうどこじきであろうと、たれでもかまわない、というのですが、そのかわり、お姫さまのおもつてている三つのことをたずねられた、それをそつくりあてなければならぬのです。そのかわり、あたればお姫さまをおよめにして、おとうさまの王さまのおから、それになつたあとでは、けつこうこの国の王さまにもなれる。けれどもその三つともあたらなければ、首をしめられるか、切られるかしなければなりません。このうつくしいお姫さまが、こんなにもひどい、わるものなのでした。おとうさまの老王さまも、そのことでは、ずいぶんつらがつておいでなのですが、そんなむごたらしいことをするなどとめるわけにいかないというのは、いつかお姫さまのむこえらみについては、けつして口だししないといいだされたため、お姫さまはなんでもじぶんのしたいままにしてよいことになつていてからです。それで、あとから、あとから、ほうぼうの国の王子が代る代るやつて来て、なぞをときそこなつては、首をしめられたり、切られたりしました。そのくせ、まえもつていいきかされていることですから、なにも申込をしなければいいのですが、やはりお姫さまをおよめにたれました。お年よりの王さまは、かさねがさねこういうかなしい不幸なことのおこるのを、心ぐるしくおもつて、年に一日、日をきめて、のこらずの兵隊をあつめて、ともども神さまのまえにひれ伏して、どうか王女が善心に見えるようにとせつないおいのりをなさるのですが、をなさるのですが、お姫さまはどうしてもそれをあらためようとはしないのです。この町で年よりの女たちが、ブランディをのむにも、黒くしてのむのは、それほどかなしがつている心のしようこをみせるつもりでしよう。まあ、そんなことよりほかにしようがないのですよ。

「いやな王女だなあ。」と、ヨハンネスはいました。「そんなのこそ、ほんとうにむちでもくらわしたら、ちつとはよくなるかもしない。わたしはそのお年よりの王さまだつたら、とうにひどくこらしめてやるところなのに。」

そのとき、そこで、町の人たちが、万歳万歳とさけぶ声がしました。ちょうど王女のお通りなのです。なるほど、王女はじつに目のさめるようなうつくしさで、このお姫さまがわるい人間だということをわすれさせるほどでしたから、ついたれも万歳をさけ

ばずにはいられなかつたのです。十二人のきれいな少女がおそろいの白絹の服で、手に手に金のチューリップをささげてもち、まつ黒な馬にのつて、両わきにしたがいました。王女ご自身は、雪とみまがうような白馬に、ダイヤモンドとルビイのかざりをつけてのつていました。お召の乗馬服は、純金の糸を織つたものでした、手にもつたむちは、お日さまの光のようにきらきらしました。あたまにのせた金のかんむりは、大空のちいさな星をちりばめたようですし、そのマントはなん千とないちよちよのはねをあつめて、縫いあわせたものでした。そのくせ、そんなどしてかざり立てたのこらすの衣裳も、王女みずからうつくしさにはおよびませんでした。

ヨハンネスは、王女をみたせつな、顔いちめんかつと赤くほてつて、ただひとしづくの血のしたたりのようになりました。もうひとつ言もものがいえなくなりました。まあ、この王女は、おとうさんのなくなつた晩、ヨハンネスが夢でみた、あの金のかんむりのうつくしいむすめにそつくりなのです。あんまりうつくしいので、いやおうなしに、いきなり大好きにさせられてしましました。この人が、じぶんのかけたなぞが、そのとおりにとけないといって、ひとの首をしめたり、きらせたりするわるい魔法つかいの女だなんて、そんなはずがあるものか。「たれでも、それは、この上ないみじめなこじきでも、お姫さまに結婚を申し込むことはかまわないということだ。よし、ぼくもお城へでかけよう。

「じうしたつていかずにはいられないもの。」

ところでみんなは、口をそろえて、そんなまねはしないがいい、ほかのものと同様、うきめを見るにきまつていてるといいました。旅なかも、やはり、おもいとまるようにいいきかせました。でも、ヨハンネスは、大じょうぶ、うまくやつてみせますといつて、くつと上着のちりをはらつて、顔と手足をあらつて、みごとな金髪にくしを入れました。それからひとりで町へでていって、お城の門まで来ました。

「おはいり。」ヨハンネスが戸をたたくと、なかで、お年よりの王さまがおこたえになりました。——ヨハンネスがあけてはいる、ゆつたりした朝着のすがたに、縫いとりした上ぐつをはいた王さまが、出ておいでになりました。王冠をあたまにのせて、王しゃくを片手にもつて、王さまのしるしの地球儀の珠を、もうひとつ手にのせていました。

「ちよつとお待ちよ。」と、王さまはいつて、ヨハンネスに手をおだしになるために、珠を小わきにおかかえになりました。ところが、結婚申込に来た客だとわかると、王さまはさつそく泣きだし、しゃくも珠も、ゆかの上にころがしたなり、朝着のそでで、涙を

おふきになるしまつでした。おきのじくな老王さま。

「それは、およし。」と、王さまはおっしゃいました。「ほかのもの同様、いいことはないよ。では、おまえにみせるものがある。」

そこで、王さまは、ヨハンネスを、王女の遊園につれていきました。なるほどすごい有様です。どの木にもどの木にも、三人、四人と、よその国の王さまのむすこたちが、ころされてぶら下がっていました。王女に結婚を申し込んで、もちだしたなぞをいいあてるところができなかつた人たちです。風がふくたんびに、死人の骨がからから鳴りました。それを、小鳥たちもこわがつて、この遊園には寄りつきません。花という花は、人間の骨にいわいつけてありました。植木ばちには、人間のしやりッ骨が、うらめしそうに歯をむきだしていました。まったく、これが王さまのお姫さまの遊園とはうけとれない、ふうがわりのものでした。

「ほらね、このとおりだ。」お年よりの王さまは、おっしゃいました。「いずれおまえも、ここにならんでいる人たちとそつくりおなじ身の上になるのだから、これだけはどうかやめておくれ。わたしになさけないおもいをさせないでおくれ。わしは心ぐるしくてならないのだからな。」

ヨハンネスは、この心のいいお年よりの王さまのお手にせつぶんしました。そうして、わたくしはうつくしいお姫さまを心のそこからしたつています。きっと、うまくいくつもりですといいました。

そういうているとき、当のお姫さまが、侍女たちのこらはず引きつれて、馬にのつたまま、お城の中庭へのり込んで来ました。そこで、王さまも、ヨハンネスもそこへいってあいさつしました。お姫さまはそれこそあでやかに、ヨハンネスに手をさし出しました。それで、よけい好きになりました。世間の人たちがうわさするように、このひとがそんなわるい魔法つかいの女なぞであるわけがありません。それから、みんなそろつて広間へあがると、かわいいお小姓たちが、くだもののお砂糖漬だの、くるみのこしよう入りのお菓子だのをだしました。でも、王さまはかなしくて、なんにもお口に入れるどころではなく、それに、くるみのこしよう入りお菓子はかたくて、お年よりには歯が立ちませんでした。

さて、ヨハンネスは、そのあくる日、またあらためてお城へくることになりました。そこに審判官と評定官のこらはずがあつまつて、問答をきくことになつてきました。はじめの日うまく通れば、そのあくる日また来られます。でも、これまで、もう最初の日からうまくいったためしがないのです。そうなれば、いやでもいのちひとついにしなくてはなりません。

ヨハンネスは、いつたいどうなるかなんのという心配はしません。ただもううきうきと、うつくしいお姫さまのことばかりかん

がえていました。そうしておめぐみぶかい神さまが、きっとたすけてくださるとかたく信じていました。ではどういうふうにいつも、それはわかりません。そんなことはかんがえないほうがいいとおもつていました。そこで、宿へかえる道道も、往来をおどりおどりくると、旅なかもが待ちかまえていました。

ヨハンネスは、王女がやさしくもてなしてくれたこと、いかにもうつくしいひとだということ、それからそれととめどなく話しました。あしたはいよいよお城へでかけて、みごとになぞをいいあてて、運だめしをするのだといつて、もうそればかり待ちこがれていきました。

けれども、旅なかもは、かぶりをふつて、うかない顔をしていました。

「わたしは、とてもきみを好いているのだ。」と、旅なかもはいいました。「だから、おたがいこれからもながくいつしょにいたいとおもうのに、これなりおわかれにならなくてはならない。ヨハンネス、きみはきのどくなひとだよ。わたしは泣きたくてならないが、こうしているのも今夜かぎりだろうから、せつかくのきみのたのしみをさまたげるでもない。愉快にしていようよ。大いに愉快にね。泣くことなら、あす、きみのでていったあとで、存分に泣けるからな。」

お姫さまのところへ、あたらしい結婚の申し込み手がやつて来たことを、もうさつそく町じゅうの人たちが知っていました。それで、たれも大きなかなしみにおそされました。芝居は木戸をしめたままで。お菓子屋さんたちは申しあわせたように、小ぶたのお砂糖人形を黒い、喪のリボンで巻きました。王さまは、お寺で坊さんたちにまじって、神さまにお祈をささげました。どこもかしこもしめつぽいことでした。それはどうせ、ヨハンネスだけに、これまでのひとたちとちがつたたい目が出ようとは、たれにもおもえなかつたからでした。

その夕方、旅なかもは、大きなはちにいっぱい、くだもののお酒のポンスをこしらえて来て、それでは大いに愉快にやつて、ひとつ王女殿下の健康をいわつて乾杯しようといいました。ところが、ヨハンネスは、コップに二はいのむと、もうすっかりねむくなつて、目を開けていることができなくなり、そのままぐっすり寝込んでしまいました。旅なかもは、ヨハンネスをそつといすからだき上げて寝床に入れました。夜がふけて、そとはまづくらやみになりました。旅なかもは、れいのはくちようから切りとつた二枚の大きなつばさを、しっかりと、肩にいわつけました。そうして、あこのこんで足をくじいたおばあさんからもらつた三本のむちのなかの、いちばんながいのをかくしにつっこむと、窓を開けて、町の丘から、お城のほうへ、ひらひらとんでいきました。

それから王女の寝ベやの窓下に来て、そつと片すみにしのんでいました。

町はひつそりしていました。ちょうど時計は十二時十五分まえをうつたところです。ふと窓があいたとおもうと、王女はながい白マントの上に、まつ黒なつばさをつけて、ひらりと舞い上がりました。町の空をつつきつて、むこうの大きな山のほうへとんでもいきました。ところで、旅なまは、王女に気づかれないように、からだをみえなくしておいて、そのあとを追いながら、王女をむちでうちました。うたれるそばから、ひどく血がでました。ほほう、たいへんな空の旅があつたものですね。風が王女のマントを、それこそ大きな舟の帆のように、いっぱいにふくらませて行く上から、ほんのりとお月さまの光がすけてみました。

「おお、ひどいあられだ、ひどいあられだ。」

王女は、むちのあるたんびにこういました。なに、ふたれるのはあたりまえです。それでもやつと山まで来て、とんとん戸をたたきましたとたんに、ごろごろひどいかみなりの音がして、山はぱつくり口をあきました。王女はなかへはいりました。旅なかもつづいてはいりました。でも、姿がみえなくしてあるので、たれも気がつきません。ふたりがながい廊下をとおつていくと、両側の壁が奇妙にきらきら光りました。それは、なん千とない火ぐもが、壁の上をぐるぐるかけまわつて、火花のように光るためでした。それから、金と銀でつくつてある大広間にはいりました。そこには、ひまわりぐらいたきい赤と青の花が、壁できらきらしていました。でもその花をつむことはできません。というのは、その花のじくがきみのわるい毒へびで、花というのも、その大きな口からはきだすほのおだからです。天井には、いちめん、ほたるが光つていて、空いろのこつもりが、うすいつばさをばたばたさせていました。じつになんともいえないかわつたありさまでした。ゆかのまん中に、王さまのすわるいすがひとつすえてあって、これを四頭の馬のがい骨が背中にのせていました。その馬具はまつ赤な火ぐもでした。さて、そのいすは、乳いろしたガラスで座ぶとんというのも、ちいさな黒ねずみがかたまつて、しつぽをかみあつてているものでした。いすの上に、ばらいろのくもの巣でおつた天蓋がつるしてあって、それにとてもきれいなみどり色したかわいいはえが、宝石をちりばめたようにのつていました。ところで、王冠をかぶつて、王しゃくをかまえて、にくらしい顔で、王さまのいすにじいさんの魔法つかいが、むんずと座をかまえていました。魔法つかいはそのとき、王女のひたいにせつぶんすると、すぐわきのりつぱないすにかけさせました。やがて音楽がはじまりました。大きな黒こおろぎが、ハーモニカをふいて、ふくろうが太鼓のかわりに、はねでおなかをたたきました。それは、とぼけた音楽でした。かわいらしい、豆粒のような小鬼どもは、ずきんに鬼火をつけて、広間のなかをおどりまわりました。こん

なにみんないて、たれにも旅なかまの姿はみえませんでしたから、そつと王さまのいすのうしろに立つて、なにもかもみたりきいたりしました。さて、そこへひとかど、もつたいらしく氣どつて、魔法御殿のお役人や女官たちが、しゃなりしやなり出てきました。でも正しくもののみえる目でみますと、すぐとばけの皮があらわれました。それはほうきの柄にキャベツのがん首をすげたばけもので、それが縫いとりした衣裳を着せてもらつて、魔法つかいの魔法で、息を吹き込んでもらつて、動いているだけでした。どのみち、こけおどかしにしていたことで、なにがどうだつてかまつたことはありません。

しばらくダンスがあつたあとで、王女は魔法つかいに、あたらしく、結婚の申し込み手の来たことを話しました。それで、あしめたの朝お城へやつてくるが、相手をためすには、なにを心におもつてることにしようか、相談をかけました。

「よろしい、おききなさいよ。」と、魔法つかいはいました。「まあ、なんでもごくたやすいことをかんがえるのさ。すると、かえつて、わからぬものだ。そう、じぶんのくつのことでもかんがえるのだなあ。それならまずあたるまい。それで首をきらせてしまう。ところで、あすの晩くるとき、その男の目だまをもつてくることを、わすれないようにな。久しふりでたべたいから。」

王女は、ていねいにあたまをさげて、目だまはわすれずにもつて来ますといいました。魔法つかいが山をあけてやりますと、王女はお城へとんでかえりました。でも、旅なかまはどこまでもあとについて、したたかむちでぶちました。王女は、あられがひどい、ひどいとこぼし、こぼし、一生けんめいにげて、やつと寝ベやの窓から、なかへはいりました。旅なかまも、それなり宿のほうへとんでもかえつていきますと、ヨハンネスは、まだねむつたままでしたから、そつとつばさをぬいで、じぶんも床にはいりました。なにしろ、ずいぶんつかれていたでしようからね。

さて、あくる日まだくらいうちから、ヨハンネスは日をさましました。旅なかまもいつしょに起きて、じつにゆうべはふしきで、お姫さまと、それからお姫さまのくつの夢をみたという話ををして、だから、ために、お姫さま、あなたはごじぶんのくつことをおもつて、それをきこうとなさるのでしようといつてごらん、といいました、これは、山で魔法つかいのいつたことばを、そつくりきいていつているだけなのですが、そんなことはおくびにもださず、ただ、王女がじぶんのくつのことをかんがえていやしないか、きいてみよとだけいったのです。

「ぼくにしてみれば、なにをどうこたえるのもおなじです。」と、ヨハンネスはいました。「たぶんあなたが夢でごらんになつたとおりでしよう。それはいつだつて、やさしい神さまが、守つていてくださるとおもつて、安心しているのですからね。けれど、

おわかれのごあいさつだけはしておきましたよ。答をまちがえれば、もう、二どとおめにかかれないとおもひますから。」

そこで、ふたりはせつぶんしあいました。やがて、ヨハンネスは、町へでて、お城にはいつて行きました。大広間には、もういつぱい人があつまっていました。審判官はよりかかりのあるいすに、からだをうずめて、ふんわりと鳥のわた毛を入れたまくらを、あたまにかつていました。なにしろこのひとたちは、たくさんにものをかんがえなくてはならないのでしてね。そのとき、お年よりの王さまは立ち上がって、白いハンカチを目におあてになりました。するうち、お姫さまがはいつて来ました。きのうみたよりも一だん立ちまさつてうつくしく、一同にむかつて、にこやかにあいさつしました。でも、ヨハンネスには、わざわざ手をさしのべて、「あい、おはようございます。」といいました。

さて、ヨハンネスがいよいよ、お姫さまのかんがえていることをあてるだんになりました。まあ、そのとき、お姫さまは、なんという人なつこい目で、ヨハンネスをみたことでしょう。ところが、ヨハンネスの口から、ただひとこと「くつ」とでたとき、お姫さまの顔はさつとかわって、白墨ように白くなりました。そうして、からだじゅう、がたがたふるえていました。けれどもう、どうにもなりません。みごと、ヨハンネスはいいあてたのですもの。

ほほう、ほほう。お年よりの王さまは、どんなにうれしかつたでしよう。あんまりうれしいので、みごとなんぼをひとつ、王さまはきっとおみせになりました。すると、みんなもうれしがつて手をたたいて、王さまと、それから、はじめてみごとにいいあてたヨハンネスを、はやし立てました。

旅なかまも、まづうまくいったときいて、ほつとしました。ヨハンネスは、でも、手をあわせて、神さまにお札をいいました。そして、神さまは、あとの二どもきっと守つてくださるにちがいないとおもいました。さて、あくる日もつづいてためされることになつていました。

その晩も、ゆうべのようすぎました。ヨハンネスがねむつているあいだに、旅なかまは、王女のあとについて、山までとぶ道道、こんどはむちも一本もちだして来て、まえよりもひどく王女をぶちました。旅なかまはたれにも見られないので、なにもかも耳に入れて来ました。王女は、あしたは手袋のことをかんがえるはずでしたから、そのとおりをまた、夢にみたようにして、ヨハンネスに話しました。ヨハンネスはこんどもまちがいなくいいあてたので、お城のなかはよろこびの声があふれました。王さまがはじめしておみせになつたように、こんどは御殿じゅうが、そろつてとんぼをきました。そのなかで王女は、ソファに横になつた

なり、ただひとことも物をいいませんでした。さて、こうなると、三ほどめも、みごとヨハンネスにいいあてられるかどうか、なにごともそれしだいということになりました。それさえうまくいけば、うつくしいお姫さまをいただいた上、お年よりの王さまのおなくなりなつたあとは、そつくり王国をゆずられることになるのです。そのかわり、やりそこなうと、いのちをとられたうえ、魔法つかいが、きれいな青い目だまをぺろりとたべてしまうでしょう。

その晩も、ヨハンネスは、はやくから寝床にはいって、晩のお祈りあげて、それですっかり安心してねむりました。ところが、旅なかもは、ねむるどころではありません。れいのつばさをせなかにいわいつけて、剣を腰につるして、むちも三本ともからだにつけ、それから、お城へとんでいきました。

そとは、目も鼻もわからぬやみ夜でした。おまけにひどいあらしで、屋根の石かわらはけしとぶし、女王の遊園のがい骨のぶら下がつて、いる木も、風であしのようにくくななくなりました。もうしきりなし稻光がして、かみなりがごろごろ、ひと晩じゅうやめないつもりらしく、鳴りつけました。やがて、窓がぱあっとあいて、王女は、とびだしました。その顔は「死」のように青ざめていましたが、このひどいお天気を、それでもまだ荒れかたが足りないといたそうにしていました。王女の白マントは風にあおられて、空のなかを舞いながら、大きな舟の帆のよう、くるりくるりまくれ上がりました。ところで、旅なかもは、れいの三本のむちで、びしひと、それこそ地びたにぱたりぱたり、血のしづくがしたたりおちるほどぶちましたから、もうあぶなく途中でとべなくなるところでした。でもどうにかこうにか、山までたどりつきました。

「どうもひどいあられでしたの。」と、王女はいいました。「こんなおてんきにそとへでたのははじめて。」「その代り、こんどは、よすぎてこまることがあるさ。」と、魔法つかいはいいました。

王女はそのとき、一ひとまでうまくいあてられたことを話して、あしたまたうまくやられて、いよいよヨハンネスが勝ちときますと、もう一度と山へは来られないし、魔法もつかえなくなるというので、すっかりしょげかえつっていました。

「こんどこそはあたらぬよ。」と、魔法つかいはいいました。「なにかその男のとてもかんがえつかないことをおもいつこう。万一、これがあたるようなら、その男はわしよりずっとえらい魔法つかいにちがいなかろう。だが、まあ愉快にやろうよ。」

そういうて、魔法つかいは、王女の両手をとつて、ちょうどそのへやにいた小鬼や鬼火などと輪をつくつて、いつしよにおどりました。すると、壁の赤ぐもまでが、上へ下へとおもしろそうにとびまわつて、それはまるで火花が火の子をとばしているように

みました。ふくろうは太鼓をたたくし、こおろぎは「ふえをふく、黒きりぎりすは、ハーモニカをならしました。どうしてなかにぎやかな舞踏会でした。

みんなが、たつぱりおどりぬいてしまうと、王女は、もうここらでかえりましょう、お城が大きさになるからといいました。そこで、魔法つかいは、せめて途中までいつしょにいられるように、そこまで送つていくといいました。

そこで、ふたりは、ひゅうひゅう、ひどいあらしのふくなかへとびだした。旅なまは、ここぞと三本のむちで、ふたりのせなかもくだけよどばかり、したたかぶちのめしました。さすがの魔法つかいも、これほどはげしいあられ空に、そとへでたのははじめてでした。さて、お城ちかくまで来たとき、いよいよわかれぎわに、魔法つかいは王女の耳のはたに口を寄せて、「わしのあたまをかんがえてこらん。」といいました。けれども、旅なまは、それすらのこらず耳にしまい込んでしまいました。そうして、王女が窓からすべりこむ、魔法つかいが引っかえそうとするとたん、ぎゅッと魔法つかいのながい黒ひげをつかむがはやいか、剣をひきぬいて、そのにくらしい顔をした首を、肩のつけ根からずばりと切りおとしました。まるで、相手にこちらの顔をみるすきさえあたえなかつたのです。さて、その首のないむくろは、みずうみの魚に投げてやりましたが、首だけは、水でよくあらって、絹のハンケチにしつかりくるんで、宿までかかえて、もつてかえつて、ゆっくり床に休んで寝ました。

そのあくる朝、旅なまは、ヨハンネスに、ハンケチの包をさずけて、王女が、いよいよじぶんのかんがえているものはなにかといつて問いかけるまで、けつして、むすび目をほどいてはいけないといいました。

お城の大広間には、ぎつしり人がつまつて、それはまるで、だいこんをいつしょにして、たばにくくつたようでした。評定官は、れいのとおり、ながながといすによりかかつて、やわらかなまくらをあたまにあてがつていきました。老王さまは、すっかり、あたらしいお召ものに着かえて、金のかんむりもしやくも、ぴかぴかみがき立て、いかめしいごようすでした。それにひきかえ、お姫さまのほうは、もうひどく青い顔をして、おとむらいにでもいくような、黒ずくめの服でした。

「なにを、わたしあがんがえていますか。」

王女は、ヨハンネスにたずねました。

すぐ、ヨハンネスは、ハンケチのむすび目をほどきました。すると、いきなり、魔法つかいの首が、目にはいつたので、たれよりもまざじぶんがぎよつとしました。あんまり、すごいものをみせられて、みんなもがたがたふるえだしました。そのなかで、王

女はひとり、石像のようじいんとすわり込んだなり、ひとこともものがいえませんでした。それでも、やつと立ち上がりつて、ヨハンネスに手をさしのべました。なにしろ、みごとにいいあてられてしまつたのです。王女は、もう、たれの顔をみようともしないで、大きなため息ばかりついていました。

「さあ、あなたは、わたしの夫です。今晚、式をあげましよう。」

「そうしてくれると、わしもうれしい。」と、お年よりの王さまはいいました。「ぜひ、そういうことにしよう。」

みんなは、万歳をとなえました。近衛の兵隊は、音楽をやつて、町じゅうねりあるきました。お寺の鐘は鳴りだしますし、お菓子屋のおかみさんたちは、お砂糖人形の黒い喪のリボンをだけました。どこにもここにも、たいへんなよろこびが、大水のようになふれました。三頭の牛のおなかに、小がもやにわとりをつめたまま、丸焼にしたものを、市場のまん中にもちだして、たれでも、ひと切れずつ、切つてとつていけるようにしました。噴水からは、とびきり上等のぶどう酒がふきだしていました。パン屋で一シリングの堅パンひとつ買うと、大きなビスケットを六つ、しかも乾びどうのはいったのを、お景物にくれました。

晩になると、町じゅうあかりがつきました。兵隊はどんどん祝砲を放しますし、男の子たちはかんしゃく玉をぱんぱんいわせました。お城では、のんだり、たべたり、祝杯をぶつけあつたり、はねまわつたり、紳士も、うつくしい令嬢たちも、組になつて、ダンスをして、そのうたう歌が遠方まできこえて来ました。

ダンス輪おどり大すきな
みんなきれいなむすめたち、
まわるよまわるよ糸車。
くるりくるりと踊り子むすめ、
おどれよ、はねろよ、いつまでも、
くつのかかとのぬけるまで。

さて、ご婚礼はすませたものの、お姫さまは、まだ、もとの魔法つかいのままでしたから、ヨハンネスをまるでなんともおもつていませんでした。そこで、旅なかまは心配して、れいのはくちようのつばさから三本のはねをぬきとつて、それと、ほんのちよつぴり、くすりの水を入れた小びんをヨハンネスにさずけました。そうして、おしえていうのには、水をいっぱいみたした大きなたらいを、お姫さまの寝台のまえにおく、お姫さまが、知らずに寝台へ上がるところを、うしろからちょいと突けばお姫さまは水のなかにおちる。たらいの水には、前もつて、三本の羽をうかして、くすりの水を二、三滴たらしておいて、その水に三ビまで、お姫さまをつけて、さて、引き上げると、魔法の力がきれいにはなれて、それからは、ヨハンネスをだいじにおもうようになるだろうというのです。

ヨハンネスは、おしえられたとおりにしました。王女は水に落ちたとき、きやつとたかいさけび声を立てたとおもうと、ほのおのような目をした、大きな、黒いはくちようになつて、おさえられている手の下で、ばさばさやりました。「どめに、水からでてくると、黒いはくちようはもう白くなつていて、首のまわりに、黒い輪が、二つ三つのこつているだけでした。ヨハンネスは、心をこめて神さまにお祈をささげながら、三ぞ、はくちようはうつくしいお姫さまにかわりました。お姫さまは、まえよりもなおなおうつくしくなつて、きれいな目にいっぱい涙をうかべながら、魔法をといてくれたお礼をのべました。

その次の朝、老王さまは、御殿じゅうの役人のこらづをひきつれて出ておいでになりました。そこで、お祝をいいにくるひとたちが、その日はおそらくまで、あとからあとからつづきました。いちばんおしまいに来たのは、旅なかまでしたが、もうすっかり旅じたくで、つえをついて、はいのうをしょつていきました。ヨハンネスは、その顔をみると、なんどもなんどもほおぢりして、もうどうか旅なんかしないで、このままここにいてください。こんなしあわせな身分になつたのも、もとはみんなあなたのおかげなのだからといいました。けれども、旅なかまは、かぶりをふつて、でも、あくまでやさしい、人なつこいちようしでいいました。

「いいや、いいや、わたしのかえつていく時が來たのだ。わたしはほんの借をかえただけだ。きみはおぼえていますか、いつか、わるものどものためにひどいはずかしめを受けようとした死人のことを。あのとききみは、持つていたもののこらづ、わるものどもにやつて、その死人をしずかに墓のなかに休ませてくれましたね。その死人が、わたしなのですよ。」

こういうがはやいか、旅なかまの姿は消えました。

さて、ご婚礼のおいわいは、まるひと月もつづきました。ヨハンネスと王女とは、もうおたがいに、心のそこから好きあつていました。老王さまは、もう毎日、たのしい日を送つておいでになりました。かわいらしいお孫さんたちを、かわるがわるおひざの上にのせて、かつてにはねまわらせたり、しゃくをおもちやにしてあそぼせたりなさいました。ヨハンネスはかわりに、王さまになつて、王国のこらすおさめることになりました。